

震災から5年、福島の高難と希望

千葉 悦子

東日本大震災と原発事故から5年の歳月が経過しようとしている。政府は原発事故被災地の「居住制限区域」「避難指示解除準備区域」の避難指示を2017年3月までに解除する方針である。福島県内外の避難者はピーク時16万人から現在では10万人余りとなり、徐々にだが復興しているようにも見える。しかし、はたしてそうだろうか。

直接死を大きく上回る震災関連死、後を絶たない自殺、子どもたちのいじめ、不登校の増加など福島の困難はさまざまな側面に表出している。福島の米や野菜からほとんど放射能が検出されないにもかかわらず、消費者が福島のものを買ひ控え、農業生産物が低価格に据え置かれたままになっているのもそのひとつである。支援の打ち切りによる自主避難者の貧困化、他方では、帰還した自主避難者の孤立も懸念される。

だが絶望的な状況のなかで、前に歩を進めてきた人々がいることを私たちは知っている。いち早く子どもたちを放射能から守ろうと「自主避難」に動いたのは乳幼児をもつ母親たちだった。校庭の「除染」を行政に促したのも福島に留まらざるをえない親たちのやむにやまれぬ対応だった。原発事故により故郷を離れた阿武隈地域の「おかあちゃん」たちが、これまで培ってきた食の技術を活かし、ふるさとの味をつないでいこうと立ち上げた「かーちゃんの力・プロジェクト協議会」をはじめ、故郷の食と農を絶やしてはならないと果敢に挑戦している農業女性が少なからずいる。子どもたちの保養や多発するDV・親たちの不安に耳を傾ける支援活動に率先して動いた女性グループの存在も忘れてはならない。

5年目を迎え、支援の打ち切り、そして原発再稼働と、巨大な力が福島の希望を奪っていかうとしているが、被災者相互、被災者と支援者相互の対話的・協働的実践の確かさを私たちは体験的に学び取ってきた。ここからさらに広げる実践的営みと研究が求められている。



PROFILE

ちばえつこ：福島大学行政政策学類教授、副学長。福島県男女共生センター館長。教育学博士。専門分野は生活構造論、農村女性・家族論、ジェンダー学習論等。東日本大震災後は、避難を余儀なくされた阿武隈地域の女性たちをつないで農産加工販売などの仕事おこしを目指す「かーちゃんの力・プロジェクト」の支援を行ってきた。主著に『小さな自治体の大きな挑戦—飯館村における地域づくり』（八潮社、2012）、『飯館村は負けない—土と人の未来のために』（岩波新書、2012）など、著書多数。